むごけりゃ抱いて寝　　小便すりゃ
抱いて寝りゃ小便する　　だぶへ投げてしまえ

## 四　踊り歌――熊野町榊山神社神楽踊

### 解説

一、昭和二十八年七月に榊山神社社務所が活字にして刊行した歌詞集を再録する。表紙裏に、「榊山神社神楽踊のいはれ」とし、「抑榊山神社神楽踊はその源流を何時頃におくものであらうか。典拠としては年中事物録を見るに『弘治二丙辰年八月一日祈願ニ付踊申候云々』とあり、弘治二年は、第百四代後奈良天皇の御宇、応仁の乱を過ること遠からざる足利時代で今から約四百年以前である。／当時農民の宝とも名づくる牛の死する事著しく、なを又田畑に害虫はびこりたるが故に之が撲滅を期する為祈願せしに、成就せるに依り『祈願ほどき』として奉納するに至った。／之が恒例となり現在特殊神事として六区踊終らざれば祭典終了せざる、天下に比聞なき神事である」（原文ノママ）という序文をつけた十六ページだての小冊子である。はじめから「牛若踊」「姫子踊」を「萩原宮踊」㈠㈡とし、「宮島踊」「長者踊」を「城之堀宮踊」㈠㈡、「子息踊」「購入踊」を「呉地宮踊」㈠㈡、「御伊勢踊」「当世踊」を「中溝宮踊」㈠㈡、「世歳踊」「御若衆」を「出来宮踊」㈠㈡、「白川長者」「向ひ海道踊」を「初神宮踊」㈠㈡としている。

一、本文に当て字が多く、仮名づかいも変則的なので、それらをできるだけ歴史的仮名づかいに改め、読みやすくしようと心がけたが、意味不明の部分は原文のままとした。また原文の振り仮名は、誤読のおそれのない限り省略することにした。

一、実際の唱歌とは若干のずれがあるが、その違いには及びえなかった。

二重踊　牛若踊　△下インヤアレー節　末上ケ

京一番の烏帽子屋へ○左折烏を誂へて○左折烏を召す人は○一条殿かや二条殿か○三で堺の吉田かや○四では四鷹の四郎さん○五では五鷹の五郎さん○六では加賀の若君よ○七では鞍馬の牛若よ○萩原宮踊ハ是マデナリ鞍馬の山から月が出る○まこと月かと出て見たら○牛若様の乗りの駒○ありやよい駒龍の駒○明け六歳の駒なれば○日本が千里に足らぬとて○唐天竺に乗りあげて○唐天竺の乗りやうは○巌石おろしに沼渡し○ようも乗られた牛若丸よ○唐天竺でつなぎやうは○貫木通しに柴つなぎ○ようもつないだ牛若よ○終

ユリ踊　姫御踊　△上インヤハーアア　平上

春がきたやら麻蒔いて○麻の麻間に米植ゑて○
腰附ヱヱ、ヱヱ長者の姫御は泉汲うう、泉汲もとて足拍子手拍子、やら面白や、柄杓は黄金金柄杓○ウンソレそうろりそうろり、そうろうおおり○ソレ長者の姫御○ソレ泉汲む姫御、乙姫御乙姫御
夏がきたやら藍植ゑて○思ふ殿御に逢ふがよい○
腰附前の通り
何時もそなたへ福参り○福は御内に、泉はそなたの奥の間に○終

ユキ踊　宮島踊　インヤーアレ節

三国一の宮島は○いかなる人の御建ある○日向の殿の判官で○清盛公の御建ある○節変インヤアハー二月一日

に大工仕事が始まりて○本節戻り十一月の中五日○廻廊までが調うて○槌千石の仰せある○宮を建てたるお祝ひに○大工小工を呼び寄せて○木地の盃取り出して○蝦の盛物お肴に○今一つあがれと強ひれられ○節変インヤハー清盛の明るその夜の夢にこそ○本節戻り十六七の乙女ばら○ばうばう眉毛に薄化粧○紺の黒縞革袴○そなたの御門に立つと見た○終

ユキ踊　**長者踊**　△インヤーアレ節

長者殿へ参りて見れば○節変インヤアハー金の御門が三つござる○本節戻り一番御門をさらりとあけて○御門の内を見物すれば○節変インヤハアー金の障子に金折敷○本節戻りちんからりと踏めば面白い○二番御門をさらりとあけて○御門の内を見物すれば○節変インヤアハー銭の障子に銭折敷○本節戻りせんしやらりと踏めば面白い○三番御門をさらりとあけて○御門の内を見物すれば○節変インヤアハー米の障子に米折敷○本節戻りしんしやらりと踏めば面白い○終

ユキ踊　**子息踊**　インヤアハア節

△これの子息は伊勢参り○名所処はどこどこか○須磨や明石や兵庫にて○その宿々がみな名所○腰附ヱヽ音に聞えし須磨寺へ参りて拝めば尊さよ、青葉の笛を見てやれば、門脇殿の御造製、無官の大夫の宝物ソーレイ宝もの

△ここは明石の一の谷○その宿々がみな名所

腰附前の通り

△ここは津の国西宮○八つ棟づくりとうち見える○終

## 購入踊

インヨー節　インヤーアレ換節行

△われは娘を三人持ちて△一番娘にやりたいものは△京で一番晒の帷子○これを買ひ下してやりまゐせう△二番娘にやりたいものは△京で一番織帛の帯○これを買ひ下してやりまゐせう△三番娘は色黒といやる△色は黒ても白身の鏡○これを買ひ下してやりまゐしよ○終

## 御伊勢踊

ユキ踊　インヤアアレ節

まづ一番に御伊勢へ参る○御戸を開くやらみごと○さて二番には西山寺へ○参りて拝めば鐘の音○さて三番には堺の商人宮川さして御漕ぎある○さて四番には塩屋の煙、ありよ立つ見やれしをらしや○さて五番には御領の御山○御領の御山の杉や檜○枝葉も茂りてやらみごと○さて六番に六艘の船よ○いつも絶えせん潮を漕ぐ○さて七番には七社の神よ○弓矢のやさきを護らしやる○終

## 当世踊

ルツ拍子　△インヤアアレー

唐から御船が三艘渡る○先なる御船は何を積む○白銀黄金を積ませたり○黄金の丸太を上積みに
腰附ヱーヱー生絹帷子当世は裾に黄金切り据ゑて○やらみごとな御船かや○当世踊りは面白や
中なる御船は何を積む○沈や麝香を積ませたり○沈の丸太を上積みに
腰附前に同じ

後なる御船は何を積む○白木の御弓に虎毛の矢壺唐の木綿織を上積に○終

ユキ踊　**世歳踊**　インヤアレ節

今年の世歳は目出度世歳○世の中ようて稲ようて○水口ぐちの御稲の柱○本は水金中黄金○穂に出て勇めばやらみごと○穂に出て勇むがみごとなれば○これのおちよぼは御蔵の御番○十三日は蔵開き○終

ユリ踊　**御若衆**　インヤアレー上

御若衆達御若衆達○おぢやれ参ろや安芸の宮島、安芸の宮島へ○宮島で御若衆に買うてやりたい物は何○金蘭緞子綾錦○御若衆達御若衆達○肩衣の上絵には鶴と亀とをかかせたり○鶴は千年亀は万年○御若衆の袴着の裾絵には○水に浮草竹にうぐひす○見下せば見下せば柳桜を植ゑまぜて○都は花の景色なるらん○終

二重踊　**白川長者**　△インヤアレイ

白川長者の一人姫○市守長者へたのめられ○たのめに何よ何品よ○五色の小袖を七累ね○むりようの帯を七筋よ○真鍮の毛抜を七咥へ○白身の鏡が七面○京なる酒を樽鯛揃へて舅殿の御目にかけよ○舅殿のおつしやれやうは○さてもみごとややらみごと○ござれ奥間の寝間の内○御寝間に御伽がいるなれば○太刀と刀と弓と矢と○まだも御伽がいるなれば○十五や六の殿なりと○十五や六の殿なれば御座のうつりも愛らしや○終

## 向ひ海道踊　インヤーレー

向ひ海道へ出て見れば○十六七の御若衆が○つばくろ色のかねを付けて○錦の袴に小脇差○御若衆どちへと問うたれば○鎌倉殿へ御使ひに○鎌倉殿のお家のかかりを見てやれば○八つ棟造りとうち見える○御庭のかかりを見てやれば○後は竹藪竹茂り○西は松山松茂る○東は杉山杉茂り○前は干潟の塩小浜○お庭の切石舟をつなぐ○終

## 二重踊　義経踊　△インヤアレイ節

明日は吉日義経公の御陣立○御陣支度を見てやれば○黒皮縅の胴丸に金覆輪の筋兜○猪首に着なす御大将○左手に御身の弓を持ち○右手に五色の采を振る○池月といふ駒に召す○御腰のかかりを見てやれば○三条小鍛冶宗近が○申しおろした太刀を召す○八百八挺に弦を張り○五万五千の御勢で○源氏の白旗押したてて○螺吹き立てて押し寄せる○その御勢が華やかな○終

## ユキ踊　我が子息踊　インヤアアレ節

我が子息を三人持ちて○一番子息の一助殿は○何を学問召さるるか○伊勢の大夫の弟子となり○歳三年にならねどが○足で手鼓手で太鼓○口では青葉の笛を吹く○二番子息の三助殿は○何を学問召さるるか○伊勢の紺屋の弟子となり○歳三年にならねどが○足で紋形手で上絵○さてはみごとな上絵かな○三番子息の乙若殿は○何を学問召さるるか○奈良の大工の弟子となり○歳三年にならねどが○足で墨矩手で鉋○五重塔を空で組む○天守閣の上でも槌を打つ○終

ユキ踊　博多踊　△インヤアアレー節

博多にはやる苧色の小袖○苧色の小袖に伊達の帯○
腰附インヨーオオシヤラシヤントノウオオ○インヨーオオシヤラシヤントノウオオ○
博多にはやる晒の帷子○晒帷子繻子の帯
腰附前の通り
博多にはやる褐色の前垂○褐色の前垂に織手の御紐○終

ユキ踊　金若踊　インヤアアレ節

金若殿のござる夜は○金山越しに笛が鳴る○左八つ八つ右九つ○中十六が前の手に○金若殿の御子息は○日に千枚の金を鋳る○金若殿のお御料人は○夜に千石の米をゆる○雨の降る夜に濡小袖○肌にもつれてなほいとし○終

ユキ踊　鎌倉踊　下　インヤーハアーア節

鎌倉の与茂が娘はずんどの手利と聞え候○足で細縫ひ手で錦○口で阿弥陀の文字を読む○五つでは績むで紬いで○六つではころ機したて候○七つでは綾も織り候よ○八つでは錦を畳み候○九つでたのめられて○十では殿御に添ひそめう○十一で屋敷定めて○十二で熊野へ参らせう○姫君はまだも幼い、明年育て参らせう○泉水の植木ならこそ明年までも待ちませう○泉水の植木ではなし、明年まで待てませぬ○姫君の召し帷子の紋には何々附けませう○肩裾に枝垂れ小柳、紋には諸国の唐松を○唐松の一の小枝にばんばら雀が巣をかけて○その鳥が立つや立

たん間に精白の米がしやらしやらと○その米を酒に造りて黄金の銚子に三銚子○その酒はいつも飲む酒、姫君たもれや、抱いて寝う○終

ユキ踊　**み熊野寺踊**　インヤアアレー節

音に聞こえしみ熊野寺○参りに参りて社壇を見れば○白銀社壇に赤銅の扉○さてはみごとい、やらみごと○御前に飾りし鰐口は○鰐口打尾に錦を結んでさげさして○さてはみごとい、やらみごと○前なる花山を見物すれば○百種の花が咲きしだれ○さてはみごと、やらみごと○乾の隅の唐松の○一の小枝に二羽の鶴○国静かにと巣をかけて○十二の卵をうみそろへ○これが餌飼をするときに○浮世は弥勒世は盛る○終

ユキ踊　**殿　御　踊**　インヤアアレ節

あの殿様へ見物に○まづさし出でて御門を見れば○敷居白銀柱は黄金○檜皮の背葺やらみごと○それから台所見てやれば○金蘭緞子ののれんもかかる○朝日も輝くやらみごと○それから広間を見てやれば○たいまの御槍が千穂やかかる○重籐の御弓が千挺かかる○虎毛の矢壺が千すやかかる○国友筒は限りない○それから奥間を見てやれば○諸国の武士集りて○弓張り合うて歌連歌○心も言葉も及びない○終

ユキ踊　**館　踊**　インヤーハーア節

今宵祝ひの夢を見た○夢は何と見た何と見た○扇の要に鷹据ゑて○館へ参りた夢を見た○館へ参りた御引きには○御馬と御太刀と御引きある○まだも御施料くだされる○和泉津の国淡路島○津の国の和泉が岳へ土居建てて○

板土居建てて門建てて○御土居がかりを見てやれば○表桜よ隅柳○御背戸に紫竹唐の竹○さてはみごとな御土居かや○終

ユキ踊　**清若踊**　インヤアハアー節

われが弟の清若は○まだも七つにならねどが○船乗人へ奉公して○ままをかしぎに富士の山○富士の山辺に松植ゑて○北へ北へとさす枝へ○美し小鷹が巣をかけて○節変インヤーレー一巣もかけよ二巣もかけ○三巣四巣五巣も六巣もかけ○ありや何鳥と人問へば○あれこそそなたの飼鷹よ○まこと飼鳥飼鷹なれば○都にのぼして都の町で遊ばせう○都ならひかやらみごと○終

ユキ踊　**甚六踊**　インヤアアレ節

これより下の甚六殿は○男美人と聞えたり○千里上方金持長者の聟にとろ○聟に行くのはいとやすけれど○千里上方行くがいや○千里上方行くがいやなれば○千里早風の船で召す○船に召すのはいとやすけれど○沖の浪風これがいや○沖の浪風これがいやなれば○千里早駈の駒で召す○駒で召すのはいとやすけれど○駒に鞍しくこれがいや○駒に鞍しくこれがいやなれば○輿や車で迎ひとる○終

ユキ踊　**補陀落踊**　インヤアアレ節

沖の御船は何処へ行く○補陀落世界へ行く船よ○まこと補陀落行くなれば○乗せてたもれやわが親を○わが親乗せてたもるなら○勢至観音舵をめす○地蔵菩薩は櫓をめす○阿弥陀仏を上乗に○沖のとなかへ押し出して○白銀

柱をゆり立てて○綾金蘭を帆に巻いて○錦の糸にて帆を垂れ○経法華経を弥帆に巻き○中でさんよの風吹けば○補陀落世界へ走りこむ○補陀落世界の有様は○いつも八月上月夜○二季の彼岸の心して○下から蓮花の花が咲く○上から五色の花が降る○栴檀香の匂ひする○弥陀の仏に手をひかれ○これへこれへと招ぜられ○これが仏の世界かや○終

ユキ踊　**米女踊**　インヤーレー節

沖の畷を同じ女が三人行く○どれが米女か問うたれば○糸縞木綿織の小袖着て○中を行くのが米女にて○米女の方へと通ふ殿御の御家のかかりを見てやれば○八つ棟造りの四方椽○四方の扉がみな黄金○そら葺く萱が銭葺で○そら天井は簀竹○表簾は糸簾○米女の方へと通ふ殿御の厩のかかりを見てやれば節変インヤーアレ節七ひき厩を七間建てて○本節戻り肘木の柱に紙を巻き○紙は何よと巻かせるか○一節こめて三節こめ○国静かにと巻かせたり○余り米女が花好きで○開く花より苔む花○つぼめ壺笠、笠の緒までがもとへよりこめ契りこめ○契りこんだるその夜さに杉屋の座敷に忍びこむ○枕取り寄せ帯をとく○帯をとく間に夜があけた○帯に鼻紙取り揃へ○あと小脇差添へて置くほどに○終

ユキ踊　**曽我寺踊**　インヤアハア踊

曽我の御寺の山見れば○鹿と女鹿とがゆるされて○遊ぶところがやらみごと
腰附ウンソレ庭の菊れんがやうに○さてもみごと愛らしや
曽我の御寺の堀見れば○鯉と鮒とがゆるされて○遊ぶところがやらみごと

腰附前の通り
曽我の御寺の稚子見れば○机にすがり学問めさるるやらみごと○終

ユキ踊　**兵衛が娘踊**　インヤアハアー節

われは都の兵衛が娘○眉目もよいでや容貌もよいが○余り心が邪見で迷ふ○思ひよらずの池に棲む○それを親衆が聞きつけられて○節換インヤーアレ僧山伏を呼び寄せて○月日の池に舞台を張りて○経法華経をよませたり○その時大蛇が浮き上り○十六角がみな落ちて○もとの姫子になられたり○終

ユキ踊　**小柳踊**　インヤアアレ節

小柳さんは女房の美人○小柳さんをしのびたい○しのびどあれどもござれども○前に小川がある故に○前に小川がある故なれば○板橋架けてしのばせう○しのびにしのんで通ひに通うて○小柳さんを今朝こそ見たよ○五畳や六畳の奥の間に○十二単を身に飾り○十二手草を手に持ちて○花の御莫蓙を敷き並べ○邯鄲枕をつき並べ○上から緞子の釣り夜着○金の屏風を引き立てて○恋も言葉も及ばない○終

ユキ踊　**長者美し姫子**　インヤアアレ節

長者殿へ参りて見れば○美し姫子が一人居る○聟になりたやしみじみと○聟になりたかものを書け○ものを書くのはいとやすけれど○墨と硯と筆がない○墨と硯と筆がないければ○長者御背戸へ竹植ゑて、元は硯よ中墨よ末は殿御の筆の軸○終

## お鈴踊　インヤーレー節

春の焼野に霧が降る○お鈴思ひにやきりがない
腰附ウンサー寝うや寝う寝うも一夜お鈴と○ウンソレ谷川の清水汲むとも水汲むとも
酒になりたや泉酒○思ふお鈴に飲まれたい○
腰附前に同じ
橋になりたや石橋に○思ふお鈴に踏まれたい○
腰附前に同じ
竹になりたや簀子竹○思ふお鈴に敷かれたい○終

## 真実踊　インヤアアレ節

我を真実思やるなれば○御門のそばに待ちござれ○もし顕れて人問はば○御門の御番と言うてござれ○人が知らねば帯をとこ○
我を真実思やるなれば○湯殿のそばで待ちござれ○もし顕れて人問はば○湯殿の御番と言うてござれ○人が知らねば帯をとこ○
我を真実思やるなれば○御庭の内で待ちござれ○もし顕れて人問はば○御庭の御番と言うてござれ○人が知らねば帯をとこ○終

## 長者御背戸七ツ谷

インヤアー節

長者御背戸の七つ谷○七つ谷から出る清水○清水ではない泉湧く○まこと泉湧くなれば、麓へ町をたてまゐせう○麓へ町をたてるなら○板屋ばかりが千五百○萱を積れば程もない○御背戸へ御堀を掘りまゐせう○堀の内へは潮がさす○京坂本の船も着く○加賀越前の船も着く○これが長者の世の中よ

## ながふり踊

ウンサア

ながふりよながふりよ、扇手拍子で踊りませう、鳥も七度巣をあがぬ○ながふりよながふりよ、来ては枕をひとつうつ○うつかもらたらのゆめでない○ながふりよながふりよ、腰にさげたる巾着は○これも関東で小判十両○終

## 御稚児さん踊

インヤアレー

お稚児さんお稚児さん○召したる帷子何染めか○伊勢の紺屋が染めた帷子
腰附博多にはやるは薄葉色○牡丹唐傘取り揃へ○かあくり帽子にかね付けて、あとから見れば八重桜○あんまりそなたのふりにさらり迷うた
お稚児さんお稚児さん○召した袴は何処染めか○奈良の紺屋が染めた袴○
腰附前の通り
お稚児さんお稚児さん○御手に持ちたは何処弓か○伊勢の平太が○矧いだ破魔のひき破魔の矢○終

## おだか踊　インヤハー

大坂面の梅の木は○枝は津の国、葉は播磨○花は近江の坂本に○
腰附まあ御殿様へよそからおちやんす○思ふのう御殿様イヤイヤのう御殿様○
夏よ来れば夏よ来れば梅の帷子な召されて○ひとりかづいて恥かしや
腰附前の通り
人はとも言へかくも言へ○わたしや吉野の花と見た○終

## 竹松踊　インヤアーレー

竹松殿を今朝こそ見たれ○京帷子に頭陀袋
腰附アー竹松殿は紅葉縞○恋にこがれて身をやつす
竹松御寝間を○今朝こそ見たれ○さんがの葛にきりこの枕
腰附前の通り
竹松殿の下緒となりて○夜昼御手にもつれたい○
腰附前の通り
これより下の川原の小石○拾うて殿御の碁盤の碁石
腰附前の通り
これより西の西山寺よ○西山寺の寒竹小竹○まだもをさなや筆の軸

腰附前の通り
これより島のお日が暮れよとなんとせう○片割月夜の晩のほど○終

## 付　ニワカの口上

解説

一、各区ごとのニワカの口上について、それぞれ覚え書きの類を集めて翻刻した。
一、あるいは共通の原形があったかとも思われるが、誤脱や転訛をおそれず、なるべく現行のままとし、表記の若干を改めるにとどめた。

### ○呉　地

ソーレ呉地氏子中より、わたくしのやうな口不調法者を、御案内せよと申されて候
ソーレ五尺の男に六尺ミズスを杖につき、我等が杖は坂東八本、ききょう六本、筑紫三本、合せて十七本杖と申されて候
ソーレ何時もの庭踊りを踊つて、当八幡様に御寄進と申されて候
ソーレ御殿のかかりを眺むれば、金子柱に黄金の垂木、檜皮の背葺、八つ棟造りと打ち見えて候
ソーレ御庭のかかりを眺むれば、南下りに北上りと打ち見え、国家安康天下泰平と申されて候
ソーレ村は富貴万福、五穀成就、今年の春夏秋の作と申されて候

ソーレわたくしの六尺棒は、何処(どこ)の氏子に当りても、御免を許されて候
ソーレテコを枕に、シンノーをこめたる団扇(うちわ)の柄尻と申されて候
ソーレ堂の辺りのお若衆、先づ一様(いちよう)にお並びよ

## ○中　溝

ソーレかやうにて候
ソーレ氏神様の御殿のかかりを眺むれば、南下り北上り、四方扉に獣尽(けものづく)しを刻みつけ、これがし(ママ)は左甚五郎のてがたとこそ申されて候
ソーレ中溝組の氏子中が申されて候、氏神様のどりし(御利生カ)やうやら、御寄進とう(と)奉りて、お伊勢踊り一踊り、当世踊り一踊り
(早変り)
ソーレ鎌倉六本京六本、シン(ママ)刀流が五本、合せて十七本こそ申されて候

## ○萩　原

一、(うちわを静かに返します)
かやうにて候へば、やがて前段(ぜんだん)、萩原庭そ氏子中がもう(申す)
一、某(それがし)不調法じんないぎにて、お宮の案内しこいたせよとこうそもう(こそ)
一、ソーレ何時(いつ)もよもなきご願の踊り、一踊り踊りて通しや、八幡様へすずしゆうめば(涼しめカ)やとこうそもいい(ママ)

（早口上、うちわを早く廻します）

ソーレ御殿のかかりを眺むれば、金すい柱に黄金尽しと打ち見える

ソーレ御庭のかかりを眺むれば、南下り北上り、天は泰平、御五穀は成就、富貴はんぼく、庭は穏かな庭ぢやとこうそ

ソーレ五尺の男が六尺二分の杖をつき、

ソーレ一尺二分の御手がござる。御手の中にお米だるは、坂東七本京六本、筑紫が三本、合せて十七本の杖の別れぢやとこうそ

ソーレ杖と申すは、ねとうらこまき、中でしんのをこめたるをたちもぎ、これが杖の別れぢやとこうそ

ソーレ我がつくのは杖でない、唯三尺の内に住垣の抜き合ひ犬ばらいよとこうそ

ソーレお堂のもらのお若い衆や、棒の振り合ひ、足中の蹴り廻し、団扇のえじりがどなたに当ると、しかと御免

## ○城之堀

ソーレかやうにて候

ソーレ同にて候

ソーレ私儀は不調法ぎの儀にて候へば、城之堀若連中様より、前段致せこうそうと申されて候

ソーレ城之堀の氏子中が皆寄り集りて、祈願の踊り一庭踊り、当社八幡様に御寄進とこうそう申されて候

ソーレ御殿のかかりを眺むれば、白銀造りに三方縁

ソーレ棟は八つ棟造りに打ち見えて候

ソーレ御庭のかかりを眺むれば、南下りに北上り
ソーレ棒の数をあらあら申せば、人道流が三十三本、人格流が三十三本、合せて六十六本を六庭六輪に使ひ分け
ソーレ花は十二の絵と椿をかき集め、女蝶男蝶とさへづるところ、さても美事や御殿かな
ソーレ棒を振り廻し、足を蹴り廻し、どちらを向いても真平御免

## ○初　神

かやうに私口不調法者、お宮に上りてお宮の伺候を案内致せよとこそ、申されやうは事にこそ候
ソーレやがてぜんだん、初神庭総氏子中の申されやうは、いつも踊る踊りかや、珍しからず、団扇拍子やばんばら踊りは一踊り、一つ踊りて当所八幡様に御寄進とこそ、申されやうは事にて候
ソーレお宮に上りてお宮がかりを眺むれば、金子柱に八つ棟造りと打ち見える
お庭がかりを眺むれば、南下りに北上り、所は富貴万福、天下泰平、五穀成就、いつも穏かなるお庭とこそは打ち見える
ソーレ杖の別れを申さうなら、五尺の男が六尺二分の杖をついたるは、一尺二分は御手がござる、一尺二分は坂東八本、京六本、筑紫に三本、合せて十七本の杖の別れをとこそ申す
ソーレ杖と申すなら、ねとうらにてこを巻き、中にしんのうをこめ、たちむぎなんどをつけたらこそ、杖の内とこそ申す
なんの我等がついたる杖は、旅で犬払ひ、垣の引き折り、すずゑとは只三尺の内をこそ申す
すずゑ、団扇のゑじり、どうのまわり、足元の毛まわし、殿御御若衆、どなたをもつて参らうか、しかつ